

## 第一回図書館十和分館整備検討委員会 終了後アンケートまとめ

①読書の必要性・重要性
読書は、知識の獲得と拡充、本を読むことで新しい情報や概念を学び、自己成長や理解力の向上を図ることができる
創造性を刺激し、新しいアイデアや視点を獲得する手段となる
コミュニケーション能力や語彙力の向上にも繋がると考えられる
他人の考えや経験を本を通じて知ること、より豊かな人間関係を築くことが可能になる。
読書はストレス解消やリラックスにも効果的
総じて読書は、知的好奇心を満たし、個人の成長や幸福に貢献する重要な活動だと言える
齋藤孝さんの著書「読書する人だけがたどり着ける場所」の中より以下抜粋。ネットで文章を読むことと、本を読むことは重大な違いがある。それは「向かい方」です。ネットで何かを読もうという時にはパパッと短時間で次にいこうとします。大量の情報と共に気になるキャッチコピーや画像が溢れています。それでますます一つのコンテンツに向き合う時間が短くなってしまふ。ネットで文章を読む時、私たちは「読者」ではなく「消費者」なのです。消費しているだけでは積み重ねはできにくい。浅い情報をいくつか持っただけでも「人生を深くなる」ことはありません。読書は「体験」なのです。実際読書で登場人物に感情移入している時の脳は、体験しているときの脳と近い動きをしているという話もあります。あなたもきっと「いまの自分を作っているのは、こういう体験だ」と思うような体験があるでしょう。読書によって人生観、人間感を深め、想像力を豊かにし、人格を大きくしていくことができるのです。
知識の習得だけでなく、想像力や表現力が豊かになり、コミュニケーション能力の向上にもつながる為、必要だと思う。
現に四万十町において、町立図書館・分館・移動図書館車が設置・運営されており、かつ学校図書館法に基づき町内全小中学校でも学校図書館が運営されています。その設置管理者の四万十町教育委員会の考える「読書の必要性・重要性」が全てです。本内容はあくまでも情報収集としてだけのものになると考えます。町立図書館十和分館の設置・検討は、四万十町教育委員会の図書館に関する教育行政の考えに基づき行われるものと考えます。【参考：文化省「子どもの読書活動の推進に関する法律」、文化省生涯学習政策局社会教育課「国民の読書推進に関する協力者会議」報告書(案)、高知県教育委員会「第三次高知県子ども読書推進活動計画(H29～33)」】
社会で生きていくために必要な知性、教養、思考力を身につけるため
読書が人々にとって必要でない、重要でないのであれば、なぜ「読書バリアフリー法」のような、全ての人が平等に読書ができる機会を目指す法律が作成されているのか。なぜ「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定されているのか。それは、読書は生きるために必要不可欠なものだからではないか。
読書の目的は、一人ひとり、時と場合によって様々であり、公共図書館における全ての読書活動は、対象となる住民が受けるべき住民サービスである。読書の権利は、読書をしない自由も含めて、生きていく上で質量ともに担保されなくてはならない。読書という活動に行き着くために支援が必要な人（子ども、高齢者、障害者など）には、支援が丁寧提供されなければならない。
分館の検討段階で、委員同士で読書の必要性、重要性を共有することはとても大切なことだと思いますが、他の自治体で検討がなされる際には、問うべき必要もない揺るがない共通認識として存在しているはずの「問い」を、ここ四万十町では改めて根幹の部分から確認していかないといけないという状況に、愕然としてしまいます。
論理的な思考力が身に付き、読解力もあわせて身につく。
自分の視野が広がる。
SNS等と違い、より自分自身としっかり向き合う体験となる。
ネット時代だからこそ、自分の軸を持ち、情報を見極める力が必要とされてくる、その力を身につけるためには、読書が不可欠。
ネットは主に「知りたい」ことを教えてくれる場、読書や図書館は「知らない」ということに気づける場であると思うので、どちらかがあれば良いということではない。
読むことが書く力はもちろん、コミュニケーション力、物ごとを考えて、行動する力にも繋がる。
学校教育の場でも朝の始業前に学力補充の学習プリント等を実施していた中学校が、20数年前より朝読書が学力向上に適しているとの検証があり全国的にも普及している。読書の重要性はそういう所でも明白である。
読書は個人の成長や知識の獲得、精神的な健康に寄与する重要な活動です。

日常生活に読書を取り入れることで、多くのメリットを享受することができます。
読書の基本的な必要性を理解し、実践する人が増えた結果、世界には様々なポジティブな変化が期待できます。
読書を通じて知識やスキルを身につけた人々が増えることで、社会全体がより健全で持続可能な方向へと進むことが期待されます。
社会全体がより健全で持続可能な方向へ進むことで、戦争が減る可能性は高まると考えられます。
読書の効用や読書をする権利を保障するための条例や政策については、いくつかの例があります。多くの国や地域で、教育や文化政策の一環として読書や図書館の利用を奨励し、支援するための法令が制定されています。
読書の効用や権利を保障するための条例や政策は、国際的および国内の様々なレベルで存在しています。
これらの取り組みは、社会全体の知識水準を向上させ、健全で持続可能な社会の実現に寄与することを目的としています。
読書を推進するための具体的な施策や法律が多くの国や地域で実施されており、これにより読書の機会が広がっています。

<b>②物理的に図書館が必要か</b>
たくさん本に触れ、読書ができるスペースというだけでなく、図書館に来る人とも触れ合うことのできるコミュニケーションの場所にもなる為、必要だと思う。
四万十町教育委員会の教育振興計画において、十和地域に図書館がない現状と、取り組みが急がれる旨の記載があります。来年度、十和地区では1小学校・1中学校となります。幼児・児童・生徒の学ぶ環境をより充実させるためにも十和地域にも図書館が必要です。また高齢の方も増え、運転免許返納をされる方も多くなっており、ただ公共交通網が脆弱な地域においては、大正分館まで行くことも非常に困難であり、生涯学び続ける環境を整えるうえでも十和分館設置は必要と考えます。
情報や流通、人の行き来が都会と比べて極端に少なく、都市部への交通の便が非常に悪い四万十町のような地方では、公共図書館の果たすべき役割は多大である。
アメリカ・マサチューセッツ州で工場労働者がストライキを起こした史実を元にした『パンとバラ』というタイトルの映画や本がある。生活の糧となる食糧だけでなく、豊かに生きるための尊厳としての「バラ」を求めることは、贅沢でもなんでもない。「物理的に病院が必要か、重要か」「物理的に学校が必要か、重要か」という問いと同じ段階の問いである。
私たちは、必然だけでは生きられない。偶然の出会いによって人生が大きく変わることがある。物理的な図書館は、その出会いを生む場所である。本を読みたいと思った時に、読みたい本はどのように思い浮かぶか。インターネットで得た情報、新聞に載っていた広告、人に勧められた本、全て自分の外からの刺激によって出会いは起こる。「特定の読みたい本を借りにいくだけの場所」としての図書館は、その役割の一部しか果たしていない。人との出会い、本との出会い、情報との出会いを生むのが図書館である。その経験を得られる場所として、図書館が必要であり重要である。
経済的な理由で知識（情報）の格差を生じさせないため必要。
十和の住民は、図書館が近くにないことで、他の地域に比べ本に触れる機会が圧倒的に少ない。
上記に挙げた読書の重要性や必要性があるにも関わらず、その経験を容易に得ることができない
地域に誰でも行ける開かれた居場所があるだけでも暮らしは豊かになる。
図書館は単なる本の貸し出し場所ではなく、自由な情報のアクセスや学びを支える重要な施設なので、十和地域の住民にも平等に情報にアクセスできる環境が必要。
十和の歴史・現在、技術、知識を形に残し、学び、これから繋いで行く場所が必要。地元企業と十和の小中学校が行っている学習（協同の川等）の際も図書館があり、そういった情報がまとまっていれば、大変役立つと思う。
十和にはいつでも誰でも気軽に行ける公共施設がない。仕事後や休日にちょっと一息つける場、リタイア後の憩いの場など、図書館がそういった場所になれば、生きていく中で大きな支えになるのでは？
読書や学びに集中できる静かな場所が必要。十和には現在ない。
地域の交流の場として必要。読書会や読み聞かせなどのイベント開催はもちろん、たとえ会話がなくても地域の人々が同じ空間で文化的な時間を共有できるのは豊かなことで、それを叶えられるのは図書館という場所があつてこそ。利用者による俳句や書評等の発表と交流の場としても活用できる。

<p>ネット関連の知識を身につける場所</p> <p>生活の中で身近に本に触れることができるという事は憲法の保障する健康で文化的な生活を営む権利である。よって生活圏の中に読書活動を推進する公共施設がない事は大きな問題。よって必要である。</p> <p>日本の中山間地域に図書館が無く、本に触れる機会が極めて少ないという問題には、以下の点が挙げられます。教育機会の格差、読書習慣の形成困難、情報アクセスの制限、文化的・社会的孤立、経済的格差の拡大、デジタルデバイドの拡大、生涯学習の機会喪失、地域活性化の阻害。これらの問題点を解決するためには、地域図書館の設置や移動図書館の導入、デジタル図書館の活用など、様々な方法で本に触れる機会を提供する努力が必要です。また、自治体や政府、民間企業の協力を得て、地域全体で読書環境の改善に取り組むことが重要です。</p> <p>高知県四万十町の十和地域に図書館が無いことにより生じる問題点について、以下のように指摘できます。教育格差の拡大、情報アクセスの不均衡、文化的・社会的孤立、生涯学習の機会喪失、経済的負担の増加、地域の魅力の低下、子どもの発達と成長の機会喪失、地域格差の是正が遅れる、移動手段の制約。</p> <p>解決策の提案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●移動図書館の導入：十和地域に定期的に移動図書館を派遣し、住民が本にアクセスできる機会を増やす。</li> <li>●デジタル図書館の普及：インターネットを通じてデジタル書籍や資料にアクセスできる環境を整備する。</li> <li>●地域コミュニティセンターの活用：地域コミュニティセンターに小規模な図書コーナーを設置し、住民が気軽に本を借りられる環境を作る。</li> <li>●地域間連携の強化：窪川や大正の図書館との連携を強化し、書籍の貸出やイベントの共有を行う。</li> </ul> <p>これらの対策を講じることで、十和地域の住民が本に触れる機会を増やし、教育や情報アクセスの格差を是正することが可能です。</p> <p>十和地域に物理的に図書館を設置することは、教育機会の均等化や文化的・社会的な交流の促進、情報アクセスの均等化、生涯学習の推進など、多くのメリットをもたらします。これにより、地域全体の生活の質が向上し、地域の持続可能な発展が期待できます。</p> <p>図書館の設置は、単に本を提供するだけでなく、地域社会の基盤を強化する重要な役割を果たします。</p> <p>中山間地域に図書館が無いことは、都会からの移住者にとって大きなデメリットとなり得ます。</p> <p>図書館が提供する多様なサービスや機能は、移住者が求める生活の質、教育環境、情報アクセス、社会的交流、生涯学習の機会などに直接関わっています。そのため、図書館の不在は移住を検討する際の大きなマイナス要因となり、結果として移住者が減少する可能性が高いと言えます。</p> <p>図書館は娯楽や小説の読書を楽しむ場として捉えられることもありますが、最近の図書館へのニーズは多岐にわたります。以下は、その一部です。学習支援、情報アクセス、デジタルリソース、コミュニティ活動の場、就労支援、趣味や嗜好の追求、地域情報提供、子育て支援、地域の防災・安全対策。これらのニーズに応えるため、図書館は従来の書籍の貸出だけでなく、多様なサービスやプログラムを提供しています。図書館は、地域社会の中で重要な役割を果たし、さまざまなニーズに対応するための施策を進めています。</p> <p>現在、大変に変化の速い時代であり、少子高齢化が著しい中山間地域において、「図書館が無い」ことがもたらす可能性のある弊害は、以下のようなものが考えられます。教育機会の不均衡、地域の文化的・知的活性化の妨げ、生涯学習の機会の制限、地域の防災・安全対策の弱体化、地域の定住者や移住者の減少。</p> <p>図書館のランニングコストが将来世代への負担になるとの指摘に対しては以下のような見解が示されます。社会的投資としての図書館、地域経済への貢献、社会的包摂と格差の縮小、未来への投資、コスト対効果の観点から。</p> <p>図書館を建設しない選択をすることで、将来に以下のような影響が起こる可能性があります。社会的格差の拡大、教育レベルの低下、地域の経済活性化の失機会、地域の文化的・知的活性化の妨げ、災害時の対応力の低下。</p> <p>図書館を建設しない選択は、将来において社会的格差の拡大や教育レベルの低下、地域経済の停滞、地域の文化的・知的活性化の妨げ、災害時の対応力の低下など、様々な負の影響をもたらす可能性があります。</p> <p>図書館の存在は、地域社会の発展と住民の福祉に不可欠な要素であり、その価値を認識し、適切な投資を行うことが重要です。</p>
--